

妙齡

泉鏡花

青空文庫

雨の日のつれ／＼に、佛、教へてのたまはく、昔某の國に一婦ありて女を生めり。此
 を幼たか、なまたけ、竹の如くにして、生れし女玉の如し。年はじめて三歳、國君其の色を聞
 の婦恰も弱竹の如くにして、生れし女玉の如し。年はじめて三歳、國君其の色を聞
 し召し、すなは、ごてん、掌に据ゑられしが、忽ち恍惚となり給ふ。然るにて
 も其の餘りの美しさに、ひととなりて後國を傾くる憂もやとて、當時國中に聞えたる、
 道、人何某を召出して、近う、近う、爾よく此の可愛きものを想せよ、と仰せらる。
 名道人畏り、白き長き鬚を撫で、あどなき顔を仰向けに、天眼鏡をかぎせし状、花
 の蒼に月さして、雪の散るにも似たりけり。
 やがて退りて、手を支へ、は、は、申上げ奉る。應、何とぢや、とお待兼ね。名道
 人謹んで、微妙うもおはしまし候ものかな。妙齡に至らせ給ひなば、あはれ才徳か
 ね備はり、希有の夫人とならせ給はん。即ち、近ごろの流行の良妻賢母にまします
 べし。然りながら、我が君主、無禮なる儀には候へども、此の姫、殿の夫人とならせたま
 ふ前に、餘所の夫の候ぞや。何と、と殿様、片膝屹と立てたまへば、唯唯、唯、恐れ
 ながら、打槌はづれ候ても、天眼鏡は淨玻璃なり、此の女、夫ありて、後ならで
 は、殿の御手に入り難し、と憚らずこそ申しけれ。

との殿よつく聞し召し、呵々と笑はせ給ひ、余を誰ちやと心得る。コリヤ道人、爾が
 てんがんきやう天眼鏡は違はずとも、草木を靡かす我なるぞよ。金の力と權威を以て、見事に此の女
 ひさうみ見すべし、再び是を阿母の胎内に戻すことこそ叶はずとも、などか其の術のな
 祕藏し見すべし、再び是を阿母の胎内に戻すことこそ叶はずとも、などか其の術のな
 からんや、いで立處に驗を見せう。鶴よ、來いよ、と呼びたまへば、折から天下太
 いの、蒼空高く伸したりける、丹頂千歳の鶴一羽、ふはくと舞ひ下りて、雪に
 すまぐろ末黒の大紋の袖を絞つて畏る。殿、御覽じ、早速の伺候過分々々と御召しの御用が
 御用だけ、一寸お世辭を下し置かれ、扱てしか／＼の仔細なり。萬事其の方に相まか
 せる、此女何處にても伴ひ行き、妙齡を我が手に入れんまで、人目にかけて藏し置け
 ひつき日月にはともあらん、夜分な星にも覗かすな、心得たか、とのたまへば、赤い頭巾を着
 た親仁、嘴を以て床を叩き、項を垂れて承り、殿の膝におはします、三歳の君をふうは
 りと、白き翼に掻い抱き、脚を縮めて御庭の松の梢を離れ行く。
 かくすさまじく可凄くも又可恐き、大薩摩ヶ嶽の半ばに雲を貫く、大木の樹の高き枝に綾
 やにしき錦の巢を營み、こゝに女を据ゑ置きしが、固より其の處を選びたれば、梢は狼も傳ふ
 べからず、下は矢を射る谷川なり。富士河の船も寄せ難し。はぐくみ參らす三度のもの
 も、殿の御扶持を賜はりて、鶴が虚空を運びしかば、今は憂慮ふ事なし？ とて、年月

を經る夜毎々々、殿は美しき夢見ておはしぬ。

恁かくてぞありける。あゝ、日は何時いつぞ、天てんより星ほし一つ、はたと落ちおちて、卵たまごの如ごとき石いしとな

り、其その水みな上かみの方かたよりしてカラカラと流れ來る。又またあとより枝えだ一ひと枝えだ、桂かつらの葉はの茂しげりた

るが、藍あゐに緑みどりを翻ひるがへ、渦うづを捲まいてぞ流れ來る。續つづいて一人ひとりの美少年びせうねん、何處いづこより落ちたり

けん、華嚴けこんの瀧たきの底そこを抜ぬけて、巖いはの缺かけちと藻屑もくづとともに、雲くもより落ちつと覺おほしきが、助けを

呼よぶか諸手もろてを上げて、眞俯まうつむ向けに流れ來きしが、あはよく巖いはに住とゞまりて、一瀬ひとせつ造つくれる件くだんの石いし

に、はた其その桂かつらの枝えだまつはりたるに、衣ころもの裾すそを卷まき込まれ、辛からくも其その身みをせき留とめつ。

恰あたもよし横よこざまに崖がけを生おひ出いでて、名なを知らぬ花咲はなきたる、樹きの枝えだに縋すがりつも、づぶ濡ぬれ

のまゝ這はひ上ありし、美うつくしき男をとこなれば、これさへ水みづの垂たるばかり。草くさをつかみ、樹きを辿たどりて、

次第しだいに上そらへ攀よち上のぼる。雫しづくの餘波あまり、つる。蔓つるにかゝりて、玉たまの簾すだれの靡なびくが如ごとく、頓やがてぞ大木たいぼくを樹き

上のぼつて、梢こずゑの根ねやさく上さくる。雫つるの餘波あまり、つる。蔓つるにかゝりて、玉たまの簾すだれの靡なびくが如ごとく、頓やがてぞ大木たいぼくを樹き

里さとの言葉ことばを知らぬ身みも、戀こひには女をんな賢かしうして、袖そでに袂たもとに蔽おほひしが、月日つきひ經つつまゝ、鶴つるはさ

すがに年としの功こう、己おのが頭かしらの色いろや添そふ、女むすめの乳ちちの色いろづきけるに、總毛そうげを振ふるつて仰ぎやうてん

く木の葉こはを搔かきぎが、男をとこの裾すそを見出みだししかば、ものをも言いはず一ひとくちばし、引咬ひつくへて撥は

ね飛とばせば、美少年びせうねんはもんどり打うつて、天てん上じやうに舞まひあがり、雲雀ひばりの姿すがたもなかりしとぞ。

げめんによほさつ 外面女菩薩 — ないしんによやしや 内心如夜叉
 こゝろえ 心得たか、と語らせ給へば、羅漢の末席に侍ひて、悟顔の周梨槃特、好もし
 めつき げなる目色にて、わが佛、わが佛殿と道人の問答より、木の葉を衾の男女の睦
 つごと 言、もそつとお説きなされと言ふ。佛、苦笑したまひて、我は知らずとのたまひぬ。

明治四十一年五月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

※題名の下にあつた年代の注を、最後に移しました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：土屋隆

2007年4月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

妙齡
泉鏡花

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>